

教育改革推進フォーラム長崎

2022年 8月20日(土) 主催 産業能率大学

【テーマ】 過去を振り返り、未来を展望する

～キャリア教育・アクティブラーニング・探究・ICT活用 生徒の学びは変容した?～

■ セッション1 <講演> 生徒の学びは変わったのか

生徒の学びは変わったのか

2022年 8月20日(土) 教育改革推進フォーラム



しもまちっハイスクール
教育コンサルタント 下町 壽男

Cp.1 生徒の学びが変わるプロセスとは

Cp.2 生徒の学びは変わったのか
変えさせられたのか

Cp.3 教育のデジタル化・個別最適な学び
は生徒の学びを変えるか



しもまちっハイスクール/盛岡白百合学園(元 岩手県立花巻北高等学校校長) 下町 壽男

■ はじめに

こんにちは、下町と申します。どうぞよろしくお願いいたします。先ほどの和田先生のお話を聞いていてワクワクしました。なんか今すぐ、明日からもやれそうな気がする。そんな気にさせてくれるお話でした。ありがとうございました。

私の話はここから一気に暗くなる話かもしれません。和田先生は具体的な実践事例のお話が多かったのですが、私は総論的な話を、批判的な視点で話させていただきます。

本日のお題「生徒の学びは変わったのか」をいただいたときに、ふと浮かんだのは3つの問いでした。

Cp1「生徒の学びが変わるプロセスとは」

Cp2「生徒の学びは変わったのか、変えさせられたのか」

Cp3「教育のデジタル化・個別最適な学びは生徒の学びを変えるのか」

これらについて、時間の許す限りお話させていただきたいと思っています。

Cp1 生徒の学びが変わるプロセスとは

生徒の学びは変わったのか、変わったとすればそれはどのようなプロセスを経て変わったのか、などについて考えてみたいと思います。

ですが、まず、その話に行く前に私が思ったのは、「生徒の変化」をゴールとする前に、その**変わっていくプロセスにおいて「生徒の周辺」はどう変化してきたのか**、どんな影響を受けてきたのか、ということも考える必要があるのではないかと思います。

■ 周辺に変化を及ぼす

いきなりですが、これは何だと思いませんか？（スライド1）そうです、フェルマーの定理です。フェルマーの定理は彼が死んでから三百数十年の間、解決しなかったんですね。いろんな数学者がチャレンジしたんですが、解決できなかった。

そして20世紀の最後の方でワイルズが解決するんですが、じゃあその前に挑戦した数学者たちは皆無駄な人生を送ったのか

かという決してそうではなく、彼らのチャレンジによって数学が発展していったということなんです。定理は証明できなかったけれど、数学そのものはすごく発展していったと。

つまり何が言いたいかというと、もしかしたら**生徒の学びは変わらなかったかもしれない、けれど、先生方のマインドが変化した。あるいは学校組織が変わった、といったことが言えるかもしれない**ということなんです。

例えばアクティブラーニング（以下 AL）について取り上げてみましょう。産能大フォーラムといえば AL ですね。皆さん「ラーニングピラミッド」をご存知でしょうか。最初のころは、AL はラーニングピラミッドとともに語られていました。そして **AL はワンウェイ型の授業を乗り越えるスペシャルなメソッドで、学習定着率をより高めるための方法である**という文脈で登場してきたと思います。

もちろんそこに対して批判する人たちもいました。「ALなんて昔からやっているよ、俺が元祖だ」「いや、俺の方がもっと昔からやってる」なんてね。そんなこと言ったら、もっとルーツをたどればプラトンだったみたいな話になりますが（笑）。

またグループワークについては、「そんな賑やかして学力は上がるのか」「教科書が終われない」「グループに馴染めない生徒はどうするのか」と「できない理由」をいっぱいあげる人たちも多く見られました。

でも、国として AL を推進するという状況の下、議論を経る中で、**日本型 AL** という、欧米でやっている PBL（問題解決学習）を中心とする AL とはちょっと違った、さらに深いというか、精神性みたいなものも含めた、いわゆる先生方のマインドセットを整えるだとか、AL を実施するためにどうカリキュラムマネジメントを行うか、といった大きいものに発展していったように思います。

もっと言いますと、「活動ありて学びなし」といった**経験主義批判**が起こり、そこから「ディープ」という声が大きくなりました。「深い学びでなきゃいかん」「どういう問いを仕掛けるか」など

スライド1

といった声です。私はこれを「ディープの合唱」(笑)と言っていますが、それがずいぶんと出てきた。そんな中で、ALという言葉がフェードアウトして、「主体的で、対話的で、」に「深い学び」ということばが加えられました。このように AL ひとつとってもその変遷をめぐって、**目的の本丸だった授業改善だけでなく、学校教育や教員文化にも様々な変化が起きてきた**ということです。

私の中でその変化をまとめると三つほどあります。一つは、何であれ、様々な人たち、職種や教科を超えた**学びのテーブルが生まれた**、ということです。二点目は AL がやって来た、黒船がやって来た、というとき、先生方は「私はこう思う」という、**学びについての見識をつまびらかにして**いかなきゃならなくなったということです。これはプロの教師として大事な場面ではなかったかと私は思います。そして三点目は、**批判的な視座を持つ人との対話**が生まれたことです。それによってより太い、骨太の日本型 AL ができたんじゃないかと私は思います。

AL の変遷を次のようにまとめてみました(スライド2)。

スライド2

ALを巡る百家争鳴



■ 様々な人たちと「学び」を語り合うテーブルが生まれた

■ 「学び」についてのそれぞれの見識がつまびらかにされた

■ 批判的な視座を持つ人との相克を経て骨太の日本型ALに進化した

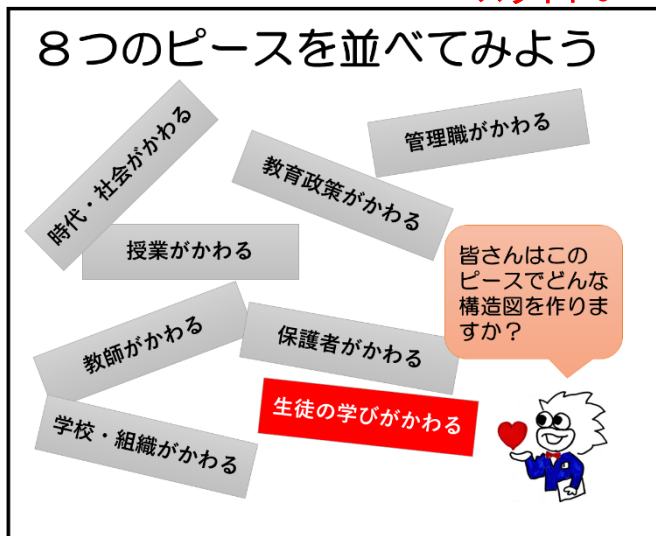
「否定の否定」は肯定ではなく、より強い肯定なんですね。AL をめぐる百家争鳴というタイトルをつけましたが、ここ数年の流れの中で、実はいろんなことが生まれ、変化していきました。

■ 生徒の変容に至る流れ

さて、「どういうプロセスで生徒が変わったのか」に話を戻します。今、スライド3のように、「〇〇が変わる」というピースを考えてみました。

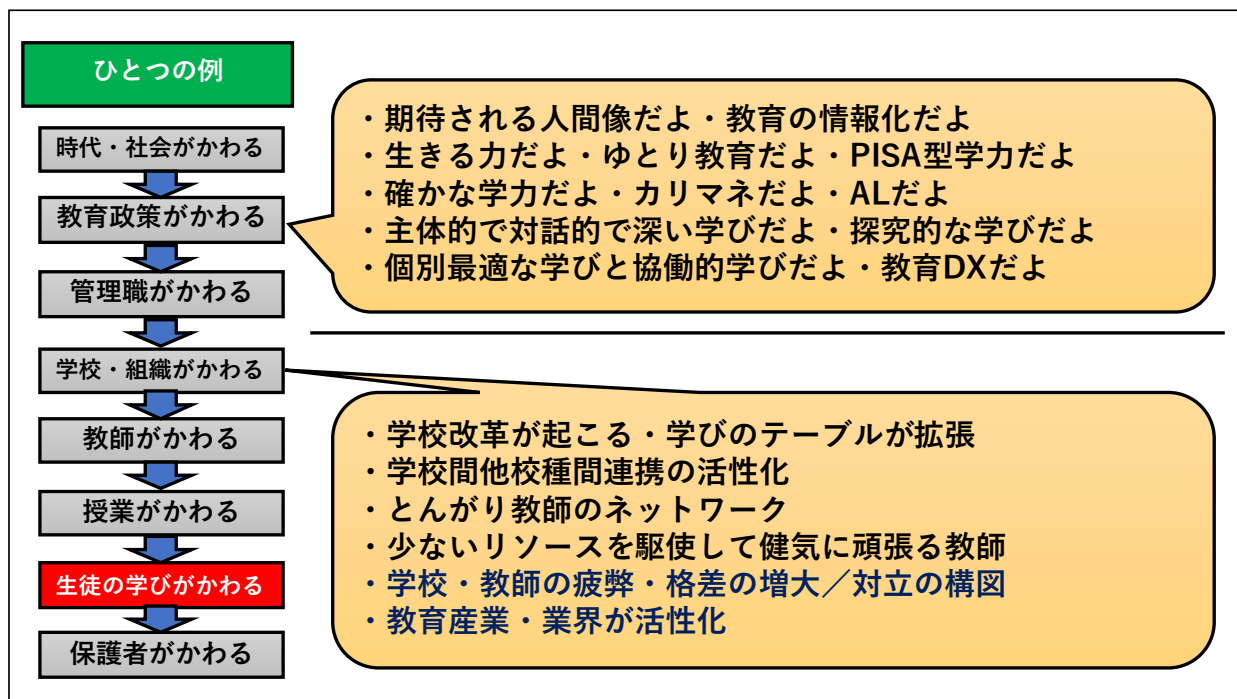
「生徒の学びが変わる」だけでなく「授業が変わる」「教師が変わる」「時代・社会が変わる」「教育政策が変わる」「管理職が変わる」「保護者が変わる」「学校・組織が変わる」という7つのピースですね。これらのピースが「生徒の学びが変わる」の前後にどのように並べられるでしょうか。皆さんも考えてみてください。

スライド3



私が考えたのは次のスライドです（スライド4）。

スライド4



一般的に、「教師が変わる」→「授業が変わる」→「生徒の学びが変わり自走しだす」といった文脈で語られることが多いと思いますが、これをもっと、ミもフタもない並べ方にしてみました。教育行政の一方方向性というか、上位下達みたいなものを表しているんですね。

「教師の学び変わる」のピースの上部に、上から「時代・社会が変わる」→「教育政策が変わる」がおかれます。日本の教育政策というのは非常にしっかりしていて、学力は学校教育法で定義されているし、学習指導要領は10年に1回は時代に即して改訂が行われていく。そうやって教育政策が変わることによって、それが管理職に通達され「管理職が変わる」となる。管理職はそれによって組織を変えていこうと努力するわけです。それによって「教師が変わる」→「授業が変わる」→「生徒の学びが変わる」、そうやってハッピーハッピー(笑)という流れがひとつ想定されます。

では、この例に対して、少し突っ込んでみたいと思います。

私が教員になってもう 40 数年ですが、その間いろんなキャッチフレーズが文部省、文科省から出されてきました。「期待される人間像」だとか「教育の情報化」とか・・・。

ちなみに 90 年代に出てきた「教育の情報化」について少し補足すると、今でこそ「教育のデジタル化」と騒がれていますが、当時 CAI (Computer Assisted Instruction : コンピュータ支援学習) という言葉がすいぶんと踊ったんです。私は情報数理系の大学を出ていたので、basic というプログラミング言語で、いろんなアプリケーションをつくっては授業で実践していました。この時期は PC を教育に取り入れるにはハードルが高く、周囲は冷ややかでした。また、パソコンを使うのか、ペンとペーパーでやるのか、といった、P&PP 論争というものも起こっていました。コンピュータをツールとして使うことに意味がある、いやない、といった侃々諤々の論争です。そんな議論が今また復活している感もありますね。

話を戻して、「生きる力」「ゆとり教育」という言葉も記憶に新しいです。ゆとり教育が出始めた頃に、PISA が始まりました。PISA2000 では数学的リテラシーで日本は世界 1 位になりました。しかし、3 年後の PISA2003 では 6 位に落ちます。落ちて平均と標準偏差から見て、得点に有意差は無いのですが、それでも大騒ぎになりました。いわゆる PISA ショックです。そして「ゆとり教育」がスケープゴートにされ「確かな学力」という言葉が登場します。第一次安倍内閣の頃だと思いますが、「教育再生会議」が設置され、「教育の品質向上運動」とか「PDCA サイクルを回す」というような、学校は経営体であり、成果を第一に考えなければならないという文脈で、企業型価値観に根差したマネジメントが取り入れられます。そしてカリキュラムマネジメントの話が出てきて、AL が登場します。

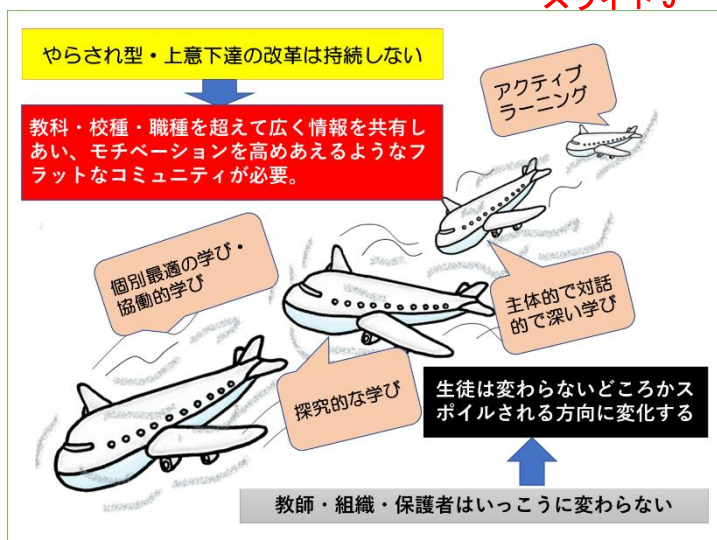
そして「探究的な学び」「個別最適な学び」「協働的学び」などがどんどん出てきてるんですね。そういった教育行政によって学校改革が起きて、**学びのテーブルが拡張し、いろんなネットワークができ、とんがっている先生・意識の高い先生を生み出し、あるいは乏しいリソースを駆使して、けなげに頑張る先生も結構おりました。**

だけどその一方で、やはり学校や先生方は疲弊していったんじゃないかと思います。それに加えて、**学校格差の増大、また学校の中での対立**なども生まれ、結果としてひとり教育産業だけが活性化していくという流れもありました。このことを敢えて私は指摘しておかなければならないと思っています。

私は「**やらされ型や上位下達型の改革**」は決して持続しないと思っています。AL だよ、主体的で深い学びだよ、探究的学びだよ、といった言葉によって、学校現場や教師がダッチロールのようなふらふら飛行を余儀なくされている。そのことを言っておこうと思います (スライド 5)。

そういった状況の中では、形はつくろっても、教師は変らない、組織は変らない、そして**生徒は変らないどころかむしろスポイルされる**。そういう方向に変化するかもしれないわけです。ですから、大事なものは「やらされ型や上位下達型の改革」ではなくて、逆のフィードバックですね、**下からの草の根的**

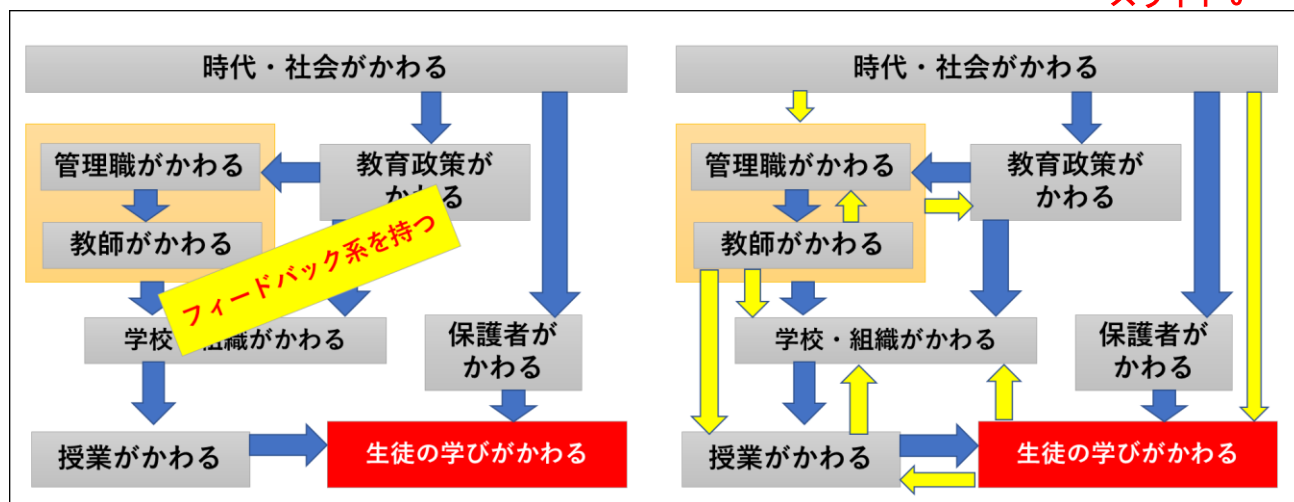
スライド 5



な動き。フラットなコミュニティ、そういうプラットフォームが必要だと思っています。

先ほどの私のフローチャートを平面に広げたものが次のスライドです（スライド6）。図が左右に2つ並んでいますが同じものです。これって左の矢印通りにいけばそれば万々歳ですよ。でもそううまくはいかない。大切なのは、右図の黄色のフローだと思います。余談ですが私は今朝、ホテルで風呂にはいってきました。湯につかりながら、なぜ湯温を一度40度に設定するといつも変わらず40度のお湯が出るんだろうってふと考えました。「あ、フィードバック系があるんだ」と気づきました。熱くなると温度センサーがそれを察知して水を足して温度を一定に保つ。こういう逆向きの流れをつくっていく運動が必要なのかと思います。

スライド6



ここで産業能率大学フォーラムのことについて話します。これは産業能率大学のHPにある「学びの輪」というコーナーです。実はその第1回が私なんです（スライド7）。

今はもう107回ですよ、すごいです。和田先生も60何回目に登場してるんですよ。こういうふうにつながっているんですよ。

スライド7

第1回：岩手県立花巻北高等学校 校長 下町壽男先生（しもまち）



初めて産能フォーラムに参加した時、「ああ。全国には、授業改善や学校改革に真摯に取り組んでいる教師たちがこんなにもいるんだ」と、とても感動したのを覚えています。

そして、そんな彼らを発掘し、光をあて、その思いを増幅させる場を提供してきた産能大の林さんの慧眼と行動力に驚かされました。加えて感心したのは、学生スタッフの素晴らしさです。彼らの、相手への誠意が滲み出た一挙手一投足に「確かな人間力」を感じました。なるほど。このフォーラムは実は学生たちを育てる場でもあったんだと膝を打ちました。場と人とコンテンツ。産能フォーラムがアクティブラーナーたちのサードプレイスとして存在し続けることを切に望んでおります。次に岩手の若手の雄である円井哲志先生にバトンタッチしたいと思います。

（次回以降、リレー形式で教育への想いや現在の取り組みについてご紹介していく予定です。）

私は何を書いたかという、こんなことでした。「全国には授業改善や学校改革に真摯に取り組んでいる先生方がこんなにもいるんだ、と感動したことを覚えています。そんな彼らを発掘し、光をあて、その思いを増幅させる場を提供してきた産業能率大学の林さんの慧眼と行動力に驚かされました」。

スライドの右図の黄色の矢印のような、文科省や教育行政がやってきたことに対して、批判をするんじゃないくて、それをホンモノにするための草の根の運動、その「場」をつくってきた林さんや産業能率大学の方々の努力には本当に敬意を表したいと思っています。

もうひとつ私が書いているのは、「加えて感心したのは、学生スタッフの素晴らしさです。彼らの誠意がにじみ出た一挙手一投足に確かな人間力を感じました」ということ。そこで思ったのは、

産業能率大学フォーラムというのはわれわれのような先生方が集まる場を提供していると同時に、**実は産業能率大学の学生の主体性を育てる場というのが裏テーマとしてある**のかなと思いました。だとすれば、これはすごく大きなヒントですよ。

先ほどの和田先生のお話にもあったんですが、生徒たちは与えられた、**先生が仕組んだ授業や仕掛けの中で、手のひらの上で主体的？になっているのではなく、そこを飛び越えたところで、先生目線になって主体性を発揮していくことが大事なんじゃないか**と思っています。だとしたら、これはもうそれぞれの学校でやっていけることなんだと思いました。

Cp2 生徒の学びは変わったのか、変えさせられたのか

■ 生徒はそもそも主体的な存在だった

次は「生徒の学びは変わったのか」、そして、どのように変わったのか。それは教師や学校によって「変えさせられた」のではないか、ということについて考えていきたいと思います

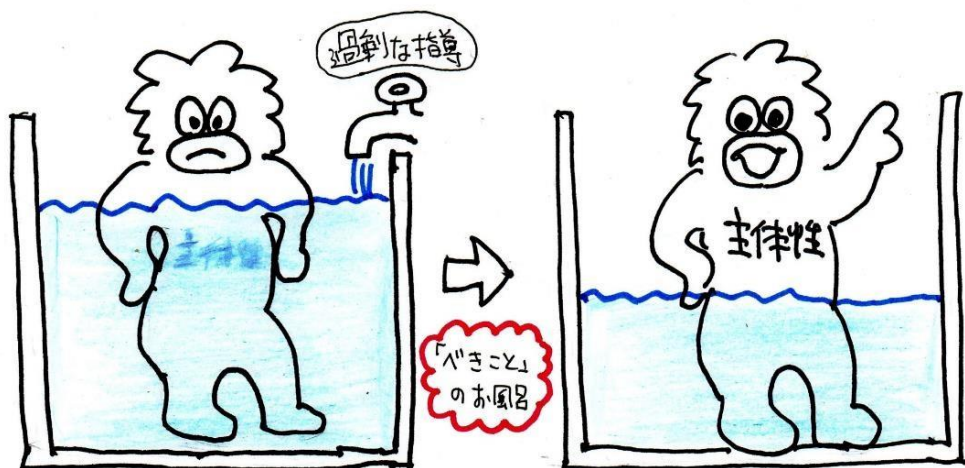
「生徒の学びは変わったのか」と言いますが、「変わった」というのはポジティブなことなんでしょうか。私はここに引っかかりを覚えます。そもそも**「何をどう変えたいの？」**って話なんです。

先ほど和田先生のお話で「あっ」と思ったのは、「ICTによって生徒が自走しだした」という言葉です。これを聞いてちょっと考えたのは、「ICT という武器を手に入れたことによって生徒たちが目覚めて、自走できるようになった」のか、それともそうではなく「本来自走できるはずの生徒たちだった」のに、これまで、教師や学校の側がストップというかブレーキをかけていたのではないか、ということです。

子どもはそもそも主体的な存在だった。ところが、学校教育の中で、「禁止・義務・制限」「同調圧力」「比較と競争による評価」「べき思想」というお風呂に生徒を浸らせてきたことで、もともとあった主体性が見えなくなったのではないか（スライド8）。私たちはそういうことも考えていかないとならないのではないかと思います。

スライド8

「〇〇すべき」のお風呂



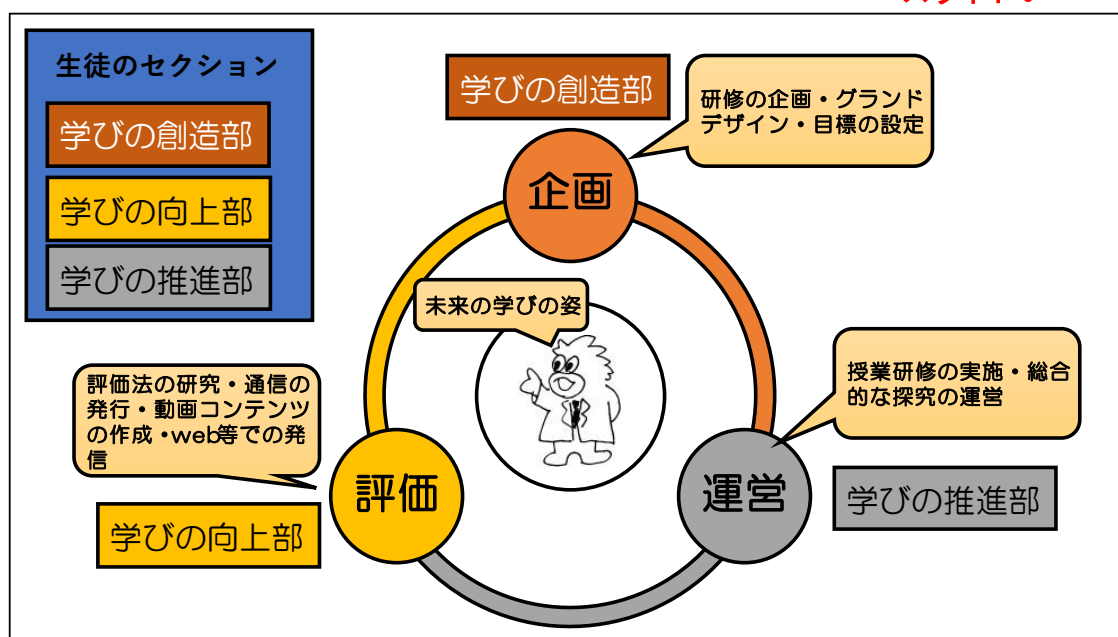
ですからむしろわれわれがやるべきなのは、足し算ではなく引き算なのかもしれません。「探究的な学びを指導するには何を足し算すればいいでしょうか」、ではなくて何を引き算するのか。なにが阻害している要因なのか、ということですね。そういうことを考えていくのが必要じゃないかと思います。

私は何年か前にある県の某進学校から、探究の推進のために講演と出前授業を依頼されました。「探究的な授業を」というオファーを受けたのですが、私が授業を行うクラスの進度が、予定していた内容よりずいぶん遅れていたもので、なぜかと思ってたずねました。すると、実はこの2週間、模試対策をしていたと言うんです。模試対策を授業で一生懸命行うということを温存しておいて、一方で探究を取り入れるということは、私はあり得ないと思うんです。これでは教師も生徒も分裂症になってしまう気がします。探究をしっかりとやるんだったら、まず、模試対策をするような授業は止めよう、ということから入っていかないとダメじゃないかと思います。

先ほどの和田先生の話に福岡西陵高校の生き生きしている生徒が紹介されて素晴らしいと思いました。私が盛岡三高でSSHを担当していたときですが、当時岐阜大学の田村知子先生に運営指導員をしていただき、岐阜大教職大学院の先生方からもさまざまな提案をしていただきました。その中で、当時の盛岡三高の授業動画の感想として、「生徒が育っている。だったら、授業改革の輪の中に生徒も加えてみたらどうだろうか」と提案されました。

これはまさに先ほど産業能率大学のフォーラムでは学生も一緒になってやっているという話にもつながるんですが、例えば進路指導や生徒指導だったら、それなりのスペシャルな人間がやればいいかもしれないけど、こと授業改革においては教務がつかさどる仕事ではなく、全員でやるべきものだ。だったら例えば企画・運営・評価といった3つの領域に分けて、先生方がローテーションして担当するというのはどうか。そしてそこにさらに生徒のセクションとして「学びの創造部」「学びの向上部」「学びの推進部」を加えることで、生徒たちが学校改革を自分事として受け止めてやっていく。そういった形をつくったらどうだろうか、と言われて、なるほどと感心して着手したんです(スライド9)。いくつか試みましたがなかなか継続はしませんでした。でも私はそのときに生徒のポテンシャルをすごく感じました。

スライド9

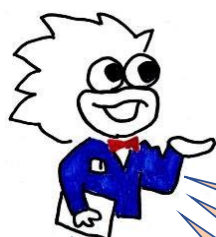


■ 教師は自ら変化を受け入れる存在であるか。教師は幸せに生きているか

次に、「生徒を変える」前に、教師が自ら変化を受け入れる存在であるかについて考えてみたいと思います（スライド 10）。

スライド 10

目標達成型学校経営を掘り下げる



目標達成がゴールなのか。目標を達成すれば幸せなのだろうか

我ら教師は生徒の目標達成を心底願っている

それが生徒の幸せにつながるからだ

だから僕らは生徒に変われという

そして教師は生徒を変える存在だと思っている

ならば学校や教師自身は、変化を受け入れ、自らを変える存在であるか

そして、教師自身、今を幸せに生きているか

疲弊し、苦しみや辛さを抱えていないか



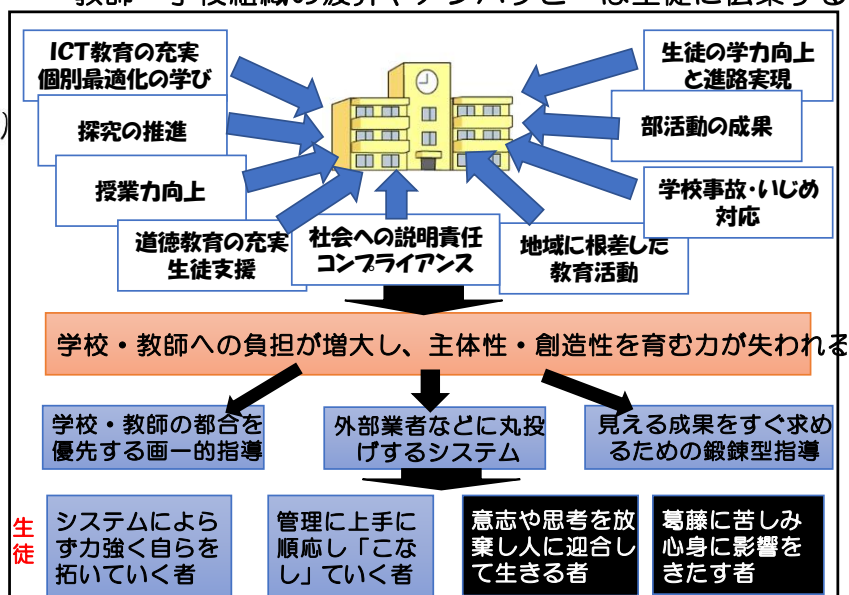
「教師は生徒を変える存在である」とよく言いますよね。それは、生徒の目標達成を心から願っているからだ。だから生徒に「変われ」と言う。じゃあそういう教師は、変化を受け入れ自らを変える存在であったか？ 教師自身は今幸せに生きているのか？ もしかして苦しんで、眉間にしわを寄せつつ、授業しているんじゃないか？こんな問いに我々はつねに向き合っていかなければならないんじゃないかと思っています。

■ 幸せも不幸せも伝染する

実際に現状を見ると、先生方の肩に乗っているものはとても多いんです（スライド 11）。

スライド 11

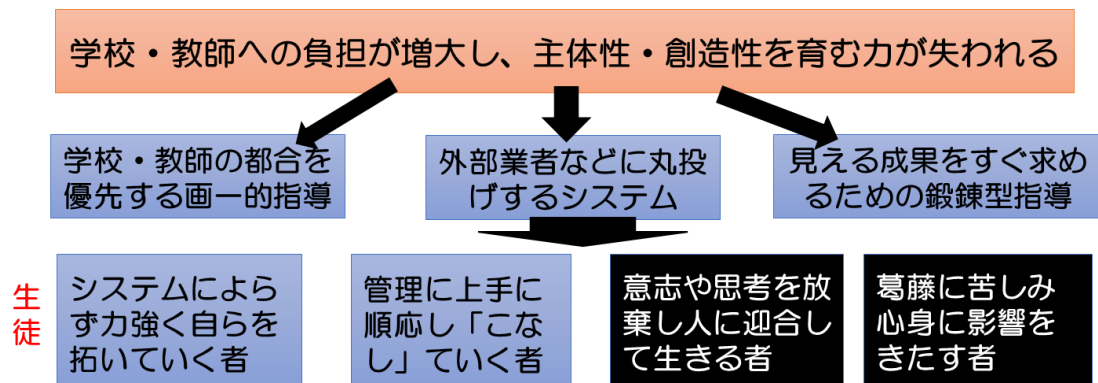
教師・学校組織の疲弊やアンハッピーは生徒に伝染する



ICT 教育、探究、授業力の向上、コンプライアンス、そして説明責任を果たせと。学校事故が起きたら授業どころじゃないですし、不登校の子どもへの対応など、もういろんな問題を教師は背負っています。そういった、いっぱいいい状態の中でも、学校は、主体性や創造性を育む力を創出していかねばならない。そして生徒は教師のたたずまいを内面化していく存在だと思います。だから教師や学校組織が疲弊していたり、先生がアンハッピーな状態だったらそれは生徒に伝染していくんじゃないかと私は捉えています。

だから「生徒が変わる」といったときに、それは先生のたたずまいを内面化してそれで変わるといふのであれば、それは変わらない方がよかった、ということもあるわけです。

スライド 11 の右の下から 2 段目の図を見てください。



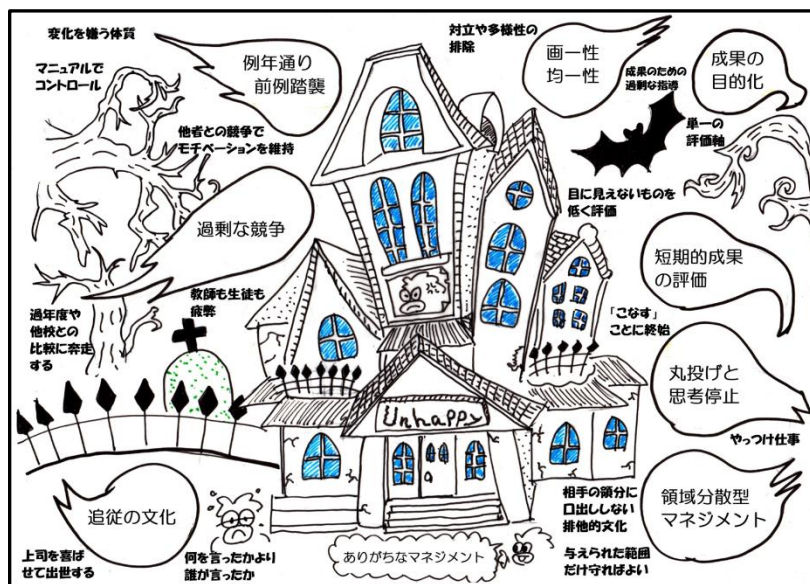
学校が疲弊した状態にあると、多様性を排除して、習熟度別編成などといった等質的な集団を作りがちです。なぜなら等質的であれば、一つの教材、一人の教師による画一的指導で済むからです。あるいは探究や情報など面倒なのは業者に丸投げをする。外部業者と協働するならいいんだけど、丸投げしてしまう。そして地域や保護者などからも見える成果をすぐに求められるため、鍛錬型指導に走ってしまう。そんな流れが生まれます。

そのような中で生徒はどうなるか。それにもかかわらず力強くやっていく生徒もいれば、そうじゃなくてそこに順応して上手に生きていく生徒もいるでしょう。でも、考えることを放棄して人に迎合して生きる、同調圧力の中でもがいて生きるといふ生徒も出てくる。あるいはそういうこともできずに葛藤に苦しんで、心身に影響をきたして不登校になったりする生徒もたくさんいるという状況があるわけです。

「生徒の学びは変わったのか」と言うならば、その前に、学校が生徒を伸び伸びと変わるような組織になっているかどうかということを見つめ直すことも大事ではないでしょうか。

学校組織の持つ病態を絵にまとめてみました（スライド 12）

学校でやっているいわゆる領域分散型のマネジメントだったり、あるいは競争原理で動いていくとか、例年通り前例踏襲の学校文化だったり、そういうものをもう一度見直すことが必要じゃないかと思っています。

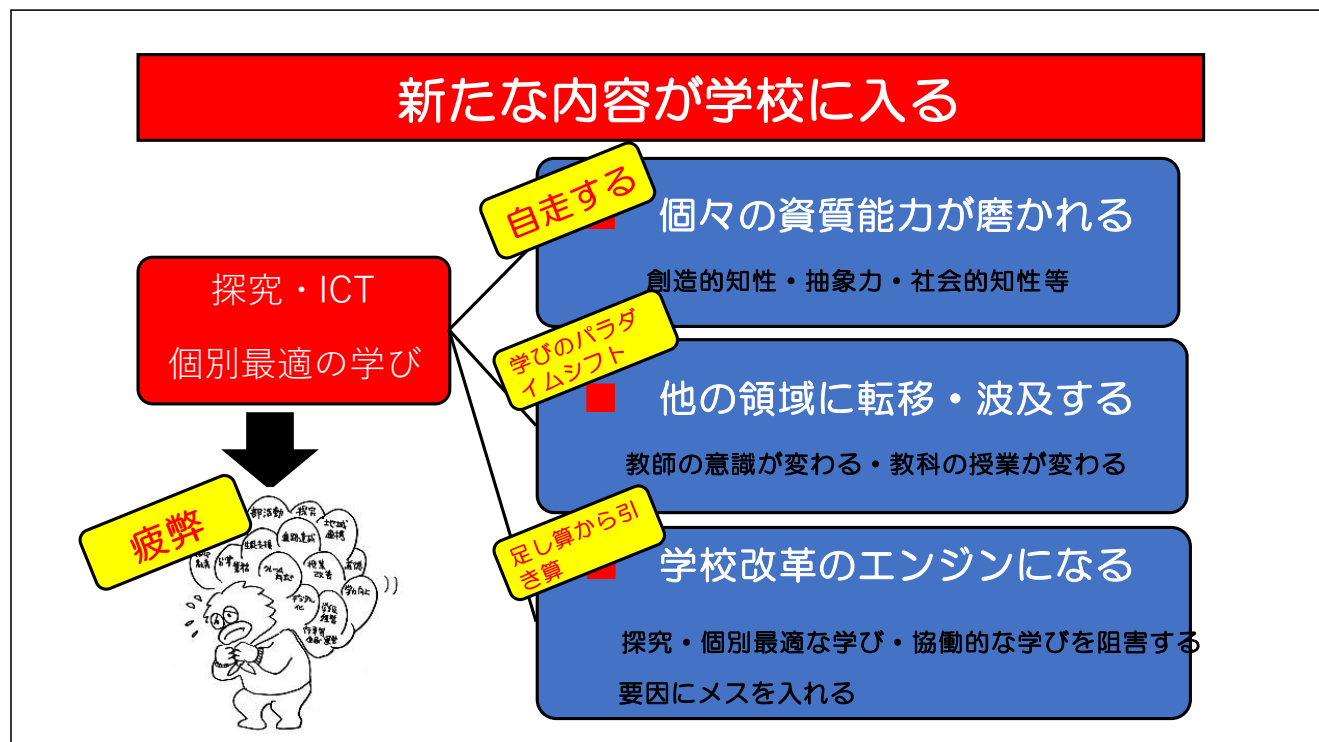


スライド 12

■ 「探究」を学校改革を行うチャンスに

「探究」「ICT」「個別最適の学び」など新たな指導内容が学校現場に入ってきたとき、どのような効果があるかを図に示してみました（スライド 13）

スライド 13



一つ目は、それを行うことで確かに**個々の資質、能力が磨かれる**でしょう。二つ目は、総探で行ったことが、**教科の中に波及していき、授業が変わっていく**ということも期待されます。

でも私はもうひとつあると思うんですよ。それは探究とか ICT もそうなんだけど、今ある学校のスタイル、例えば週に 45 分 7 コマ毎日ありますよとか、テストが何回あってそのテストでだめだったら再テストに回して、補習があってと、嫌でも目標を達成に向かわせるようなある種の最適化システム、それが実は本当の探究的学びには親和しない部分があるんじゃないかと私は思うんです。

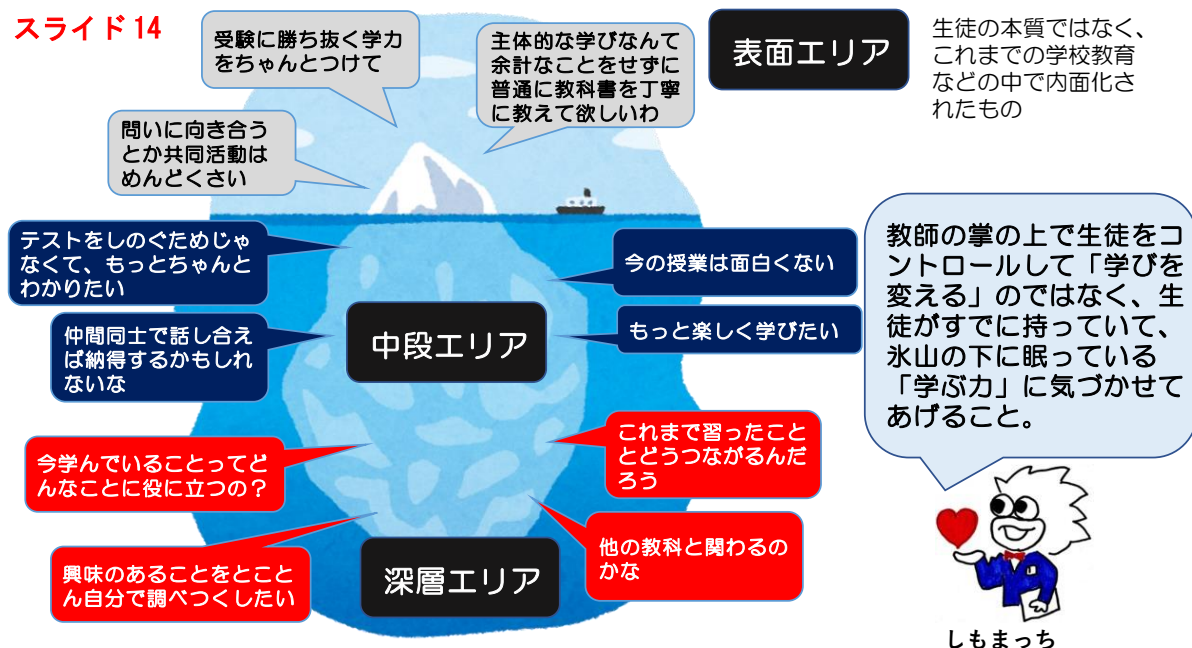
では、今の学校に合うように、探究的学びをカスタマイズしてしまうのか。でもそれって違うと思います。**探究的学びをしっかりおこなうために、逆に学校の方を変える**ということです。

だから、探究的学びがやってきました、ICT デジタル化がやってきました、そしたら「あ、それはチャンスですね、学校を変える、組織を変える、教師のマインドセットを変える」と。そっちを期待したいと私は思っています。

■ 「ニーズに応える」から「眠っているニーズを掘り起こす」へ

さて、「生徒のニーズって何かな」と考えたとき、それはいろいろあります。例えば「受験に勝ちぬける学力をちゃんとつけて」という生徒もいれば、「また問いに向き合う授業やるんですか」「グループワークは疲れます」「主体的な学びなんてせずに普通に教科書を丁寧に教えてほしい」という生徒もいます。「早く終わって放課後の部活に専念したい」とか。みんながみんな授業に期待して目を輝かせているわけじゃない。でもそれらは**表面的ニーズ**、あるいは経験の中で「生きる術」として身につけてしまったニーズなのではないかと思うんです。

スライド 14

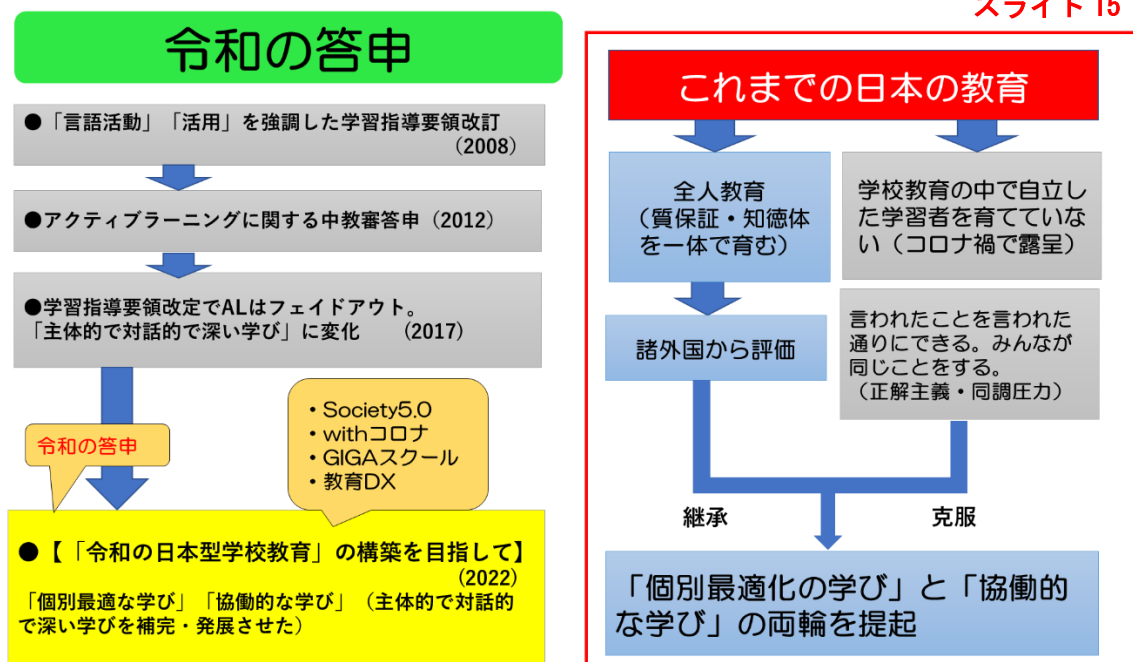


ニーズには表面エリア、中段エリア、深層エリアがあると私は考えます（スライド 14）。表面にあるのは生徒の本質ではなくて、これまでの学校教育の中で培われてきてしまったものかもしれない。そこで、そういった表面的ニーズに向き合うのではなく、実はもっと深いところを掘り下げてみたい。深いところには、探究をしたい、興味あるものをとことん調べてみたいとかの欲求が本来的にあるはずなんです。そこにアプローチするにはどのような授業を行えばよいか、それができる学校組織をどう構築していけばよいのか。これはとても大きなテーマになっていくと思います。

Cp3 教育のデジタル化・個別最適な学びは生徒の学びを変えるのか

最後にデジタル化の話をしてします。和田先生のレポートにも登場しましたが、「令和の答申」といわれるものがありますよね（スライド 15）。

スライド 15



いわゆる「個別最適な学び」と「協働的な学び」が抱き合わせで出てきたというものです。それは「主体的で対話的で深い学びを補完・発展させる」という趣旨ですが、これが出てきた背景として、Society5.0、with コロナ、GIGA スクール構想、教育 DX などがあります。これまで日本の全人教育力や、全体の質を保証するという点は諸外国から高く評価されていました。外国に行くと「日本の教育って素晴らしい」ってよく言われますよね。

ところが一方、コロナ禍で露呈したのは、日本の学生は、言われたことはできるけれど、皆と同じことしかしようとしなないという点が見られること、あるいは ICT 教育におけるインフラ上の問題点もありました。そこでこのような答申が出てきたわけです。

それを私はもろ手をあげて歓迎するというわけじゃないんですが、否定的ではありません。でも、せっかくの対談なので議論ができるように敢えて批判的視座に立って述べます。

一つは、私が以前「情報」の授業を担当していた時の話です。生徒に「スマホはどんなときに使うか」という調査をしたところ「動画を見る」「ゲームをやる」・・・とか。これって、見ると全部受け身の活動なんです。（スライド 16）

そもそもテクノロジーとは、多様性を埋めるデバイスだと私は思っています。

例えば高齢者、障がい者、難病を抱える人、遠隔に住む人などといった、社会的弱者のハンディをなくして公正にするためにそこにテクノロジーの存在価値がある。

だとすればそれは主体性を促進する道具であるはずなんですが、生徒たちの使い方を見ていくと、むしろ受動化を促進する装置になってしまっているように感じられるんです。

そういう状況の中で一人1台のタブレットを与えたときに、これはよっぽど上手にやっていかないと、単なる受け身的な使われ方でお茶を濁すだけになってしまうのではないかと、そんなことも考えていかなきゃならないのではないのでしょうか。

テクノロジーは主体性を増幅させるツールなのか、受動化を促進する装置なのか

用語などを調べる
(WIKIなど)

ネットショッピング
(Amazonなど)

動画を観る
(Youtubeなど)

SNS
(Line Twitter など)

天気情報を見る

時刻表や列車の運行
を調べる

地図で場所を調べる
(Google map など)

ゲームを楽しむ

英訳・和訳に活用
(google翻訳など)

音楽を聴く

受動的（受け身）な学び

スライド 16

そしてもうひとつ。学びというのは、何かの資格などを取るために知識や技能を先生が生徒に植え付けるといったものではないということです。例えば自動車学校で自動車免許を取るために知識をインストールするというのであれば、それは AI に取って代わられるものだと思います。だけどこれって学びではないじゃないですか。先生が言ったことを生徒に伝えて、それがちゃんと伝わったかどうかをテストによって再現させる。こういうのは学びではないと思うんです。

学びというのは、先生が 1 つのことを言っても聞いている人は皆が違うことを考えていくということだと思います。だとすれば、教師とは、自分自身がつねに知に飢えていて、その欠乏している知を生徒たちと一緒に獲得していこうという情熱を持っているとか、教えることや学ぶことが楽しくてしょうがないからその楽しさを生徒と共有したいとか、そういう思いを持っていることでは

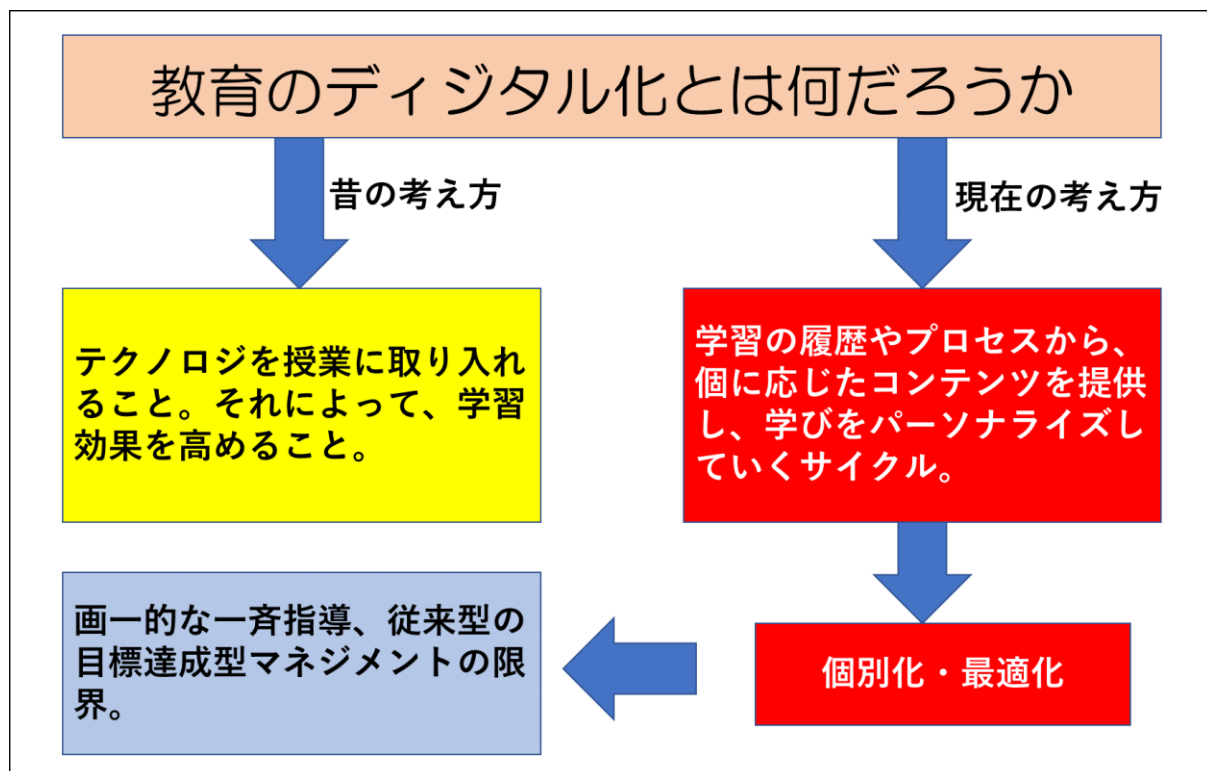
ないかと思います。学びには「先生がこんなに数学ラブなら私もその数学を愛してみよう」という欲望のミメシス（模倣）構造があるのだとよく言われます。

今、どこに行っても「教師はファシリテーターであるべき」という声がかまびすしいのですが、そんなミもフタもない方向ではなく、**学びを、子どもたちと共に好奇心をもって楽しむような教師でありたい**と思いますし、**教師がそのような自由を手にするような学校改革が必要である**と私は考えています。

■ 教育とは「幸せ」について考えること

最後に、教育のデジタル化の中で「個別最適化」という話ですが、これは**学びのパーソナライズ化**だと思います（スライド 17）。例えば Netflix や YouTube を見る。そうすると「あなたにお勧めの動画はこれ」って連絡が来ますね。どこにアクセスしたのかデータが全部残っていて、それらを AI などが分析して「あなたに最適なものはこれですよ」と提供してくれる。そういうふうに「個別化」と「最適化」が進んでいく。それはそれで、それぞれがハッピーになるかもしれない。だけど、そんな**最適まっしぐらのコースを歩ませることで、果たして生徒たちは本当に幸せになっていくか**、ということを考えたいです。

スライド 17



次のスライド 18 は「**長寿管理番付 2022**」です。寿命と医療と幸福度の順位を合算して番付するのですが、これを見ると日本は 15 位。ところが寿命と医療を合算するとトップなんです。でも幸福度が 56 位とめっちゃめっちゃ低いことによって 15 位になっているということです。**もし幸福度が 18 位以内だったら日本は世界一の長寿管理番付国です**。日本は幸せな長寿国としてロールモデルとしてその姿を世界に紹介できるんです。**そうすると国のミッションって何だろう？**私は幸福度を上げることだと思います。

スライド 18

長寿管理番付 (Longevity Management Scorecard) 2022 「20ファースト」調査

順	国	寿命	医療	幸福度	スコア	65歳以上の人口比率(%)
1	スイス	7	16	3	26	19
2	オーストラリア	12	9	11	32	16
3	ノルウェー	24	12	6	42	18
4	フランス	18	3	21	42	20
5	オランダ	27	11	5	43	20
6	スペイン	10	6	27	43	20
7	フィンランド	34	10	1	45	22
8	イスラエル	16	18	12	46	12
9	デンマーク	46	5	2	53	20
10	ニュージーランド	26	19	9	54	16
15	日本	4	4	56	64	28

「寿命」「医療」「幸福度」という3つの指標を用い、それぞれの順位を合算した「スコア」が小さいほど高齢化への対応が「よい」国としている。

幸福度が18位以内ならば日本は世界一になる

幸福度が低い要因は？

「世界幸福度報告」及びレガタム繁栄指数にその答えがある

ではみてみましょう！

では次に「世界幸福度報告 2019 年ランキング」(スライド 19) を見ましょう。これは国連が発行する幸福度調査です。

世界幸福度報告 (World Happiness Report) 2019年ランキング

国連「持続可能開発ソリューションネットワーク」が発行する幸福度調査

困ったときに頼ることができる親戚や友人がいるか

自分の心身で生命維持し、自立した生活ができる生存期間

人生で何をするかを選択の自由で満足しているか

過去1か月の間にチャリティなどに寄付をしたことがあるか

不満・悲しみ・怒りの少なさ。社会・政府に腐敗が蔓延していないか

順位	国名	人口あたりGDP GDP for capita	社会的支援 Social support	健康寿命 Healthy life expectancy at birth	人生選択の自由度 Freedom to make life choices	寛容さ・気前の良さ Generosity	腐敗の認識 Perceptions of corruption	総合
1	フィンランド	1.340	1.587	0.986	0.596	0.153	0.393	7.769
2	デンマーク	1.383	1.573	0.996	0.592	0.252	0.410	7.600
3	ノルウェー	1.488	1.582	1.028	0.603	0.271	0.341	7.554
4	アイスランド	1.380	1.624	1.026	0.591	0.354	0.118	7.494
5	オランダ	1.396	1.522	0.999	0.557	0.322	0.298	7.488
6	スイス	1.452	1.526	1.052	0.572	0.263	0.343	7.480
7	スウェーデン	1.387	1.487	1.009	0.574	0.267	0.373	7.343
8	ニュージーランド	1.303	1.557	1.026	0.585	0.330	0.380	7.307
58	日本	1.327	1.419	1.088	0.445	0.069	0.140	5.886

※ 2020は62位に後退

2019 年度ランキングは 58 位、2020 年度は 62 位です。日本の何が低いのか？ GDP や社会的支援は上の方の国に近いのに、圧倒的に低いのは「寛容さ・気前の良さ」です。そして社会・政府への「腐敗の認識」も低いです。

もう一つ言いますと、「レガタム繁栄指数」というものがあります(スライド 20)。イギリスのシンクタンクが行っている国の豊かさを示す指数です。これらは先の 2 つよりもっと細かく項目が設定されています。

レガタム繁栄指数

英国のシンクタンク
が行っている国の豊
かさを示す指数

参考 産業精神保健研究機構 ホームページ
(<http://riomh.umin.jp/happy.html>)

2009 Rank	2018 Rank	2019 Rank	Country	Safety and Security	Personal Freedom	Governance	Social Capital	Investment Environment	Enterprise Conditions	Market Access and Infrastructure	Economic Quality	Living Conditions	Health	Education	Natural Environment
1	2	1	Denmark	5	2	3	2	6	7	8	8	1	8	3	10
3	1	2	Norway	2	1	1	1	2	9	15	12	7	5	11	7
4	3	3	Switzerland	1	12	7	8	13	3	7	2	4	3	12	5
2	4	4	Sweden	11	4	6	9	10	13	5	4	3	15	17	1
5	5	5	Finland	17	3	2	4	7	18	10	21	6	26	6	2
6	6	6	Netherlands	12	5	4	6	12	8	4	6	2	9	8	54
10	7	7	New Zealand	13	10	5	7	3	14	21	19	26	22	10	6
8	9	8	Germany	21	13	9	13	15	4	11	5	5	12	21	17
7	8	9	Luxembourg	3	8	8	21	22	16	2	7	9	19	33	9
9	11	10	Iceland	6	6	13	3	25	30	12	16	20	7	13	8
16	10	11	United Kingdom	16	15	11	14	4	6	9	15	8	23	15	24
14	12	12	Ireland	14	9	14	12	23	10	23	3	12	20	16	14
11	15	13	Austria	9	17	15	11	11	19	17	22	13	10	22	3
12	13	14	Canada	18	7	10	10	14	15	19	38	16	25	5	15
15	14	15	Hong Kong*	4	41	16	28	5	1	3	9	14	6	4	28
18	16	16	Singapore	7	95	25	18	1	5	1	1	10	1	1	91
13	17	17	Australia	26	14	12	15	9	21	29	31	21	18	9	19
17	18	18	United States	58	22	21	16	8	2	6	17	29	59	14	25
21	19	19	Japan	10	31	18	132	17	17	17	17	17	17	17	17
23	20	20	Malta	19	18	23	17	33	22	33	14	11	14	35	41

項目
安全・安全保障
個人の自由
権力のガバナンス
社会関係資本
投資環境
企業環境
市場アクセス インフラ
経済体制の質
住環境
健康
教育
自然環境

家族との関係、社会的
ネットワーク、対人的
な信頼感、組織への信
頼感、社会参加といふ
要素から算出

スライド 20

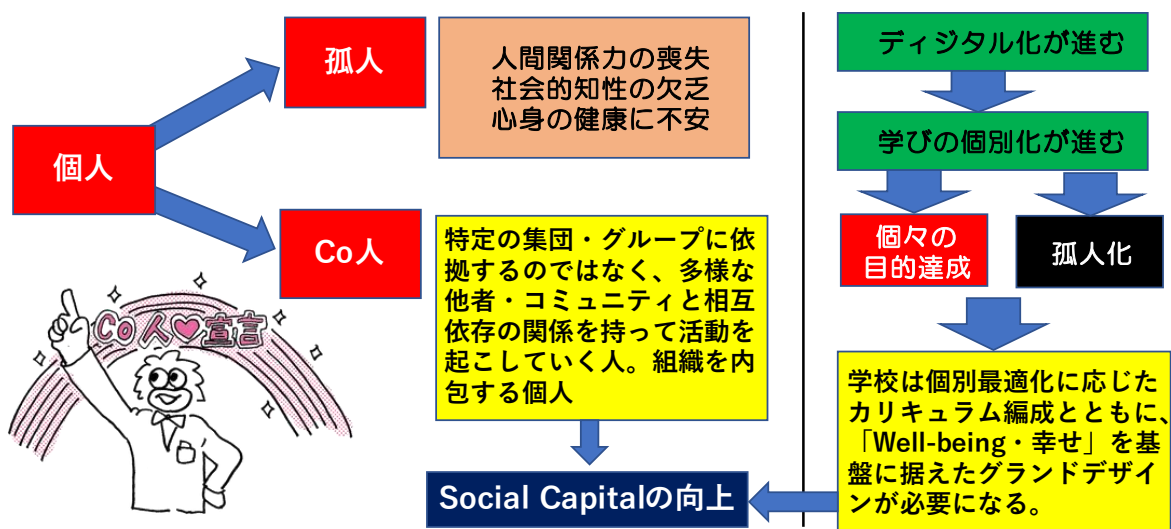
ここでは日本は世界で 19 位です。でもそれぞれの項目は悪くないんです。けどなんと、**social capital** の項目のスコアが 132 位というめっちゃめっちゃ低い数字です。本当に低いです。**social capital** は家族との関係、社会的ネットワーク、対人的な信頼感、組織への信頼感、社会参加という 5 要素から算出されていて、そこが低いんです。ということはその部分をあげていくことで日本は幸せな長寿国になりうるんですよ。それが国の使命だと思います。

だとすれば、教育の側からそういった部分を解決していくというのが、すごく大事じゃないかと思っています。

つまり「個別最適化の学び」を進めるのであれば、それと同じくらいの熱量で Well-being、幸せな学び、生徒に幸せに生きるということを進めていくのが大事だと考えています（スライド 21）。以上で私の話は終わりです、ありがとうございました。

スライド 21

教育のミッションは幸福度をあげること



■ セッション2 リフレクション

講演後、和田先生と私と、ファシリテーターの後田先生の3人でパネルディスカッションを行いました。その中で、私が発言したことの中からいくつかを以下に記します。

■ 教育の情報化の推進

ある高校の校長のときでしたが、発達障害の生徒から、タブレットを使って黒板を写すことを認めてほしいということだったので職員に囚ったところ、シャッター音が他の生徒の気になるんじゃないか、などと反対を唱える先生もいました。結局通しましたが、そのときに私は、だったら「そういう生徒のためにタブレットがある」という発想ではなく、皆が持って良いことにしたらどうだろう。そうすればよりクリエイティブな学びが促進されることになるんじゃないか、と提案しました。でもこれは職員から却下されました（笑）。今もやっぱりそういう先生方が多いのかなあという感じです。ICTテクノロジーが、公正さを担保するデバイスという見方から、それを超えて、イノベーションを生み出すツールに向かうということが、教育のデジタル化の流れのように思うので、今後は普通に文房具のように使われていくのだと思いますが。

■ 幸福度について

チャットの質問をちょっと読んでみます。

個人の幸福は社会全体の安定や幸福があって成り立つということ、またその逆もしかり、だなど下町先生のお話を伺って再認識しました。他人を不幸にして自分の幸福を成立させてはならない、という文化を生徒に促す前に、私たち教員がまず持っていないとならないと同時に思いました。教員生活がそういう文化をはぐくむために必要なことは何だとお考えでしょうか？

私は東日本大震災があったとき、考え方が大きく変わりました。被災地は多くの支援を受けました。世界中からいろんな人が訪れました。海外の貧しい子どもたちが自分のお小遣いを貯めて寄付したいとか、お菓子を送ってあげたいとか、という声を聞いて、すごく感動したんです。

しかし、一方で、何かそこで一発当ててやろうとか、陸前高田の一本松の下でピースをして写真を撮ってすぐ帰ってしまう政治家とか、拳句の果てには「怪しいお米セシウムさん」というテロップ事件、大文字送り火の護摩木に「陸前高田の松の木は使わない」とか。それから野球の選抜大会で「花巻東高校は放射線で汚染されているから甲子園に来るな、瓦礫を撤去している」とかの心ない声もいっぱいあったんです。

そのときに思ったのは「教育屋としての使命って何かな」と考えたときに、それは学力を向上させようというのはもちろんそうなんだけど、それだけじゃなくて、いわゆる教育基本法の理念を持ってそれを実践する者でなくちゃいけない、ってこと、そこを考えました。民主的で文化的な国家を担う子どもたちを育てる、世界の平和、人類の福祉を向上させる、差別をしないとか、そういう子どもを育てる。幸福な世界を実現するための人づくりですね。そこに立脚していくことで私たち教師は、真正な教師になりうるんじゃないかと思いました。

■ 教師の温度差があり組織づくりがうまく進まない。どうすればよいか。

学習指導要領の6つの枠組みがあります。「何ができるようになるか／資質・能力」「何を学ぶか／カリキュラム編成、教育過程」「どのように学ぶか／教育方法」「何に目をむけるか／発達段階」「何が身についたか／評価」「何が必要か／マネジメント」。この6つの枠組みがあるんだけど、授業改善とか探究とかICTとかいったときに、われわれって、つい「どのように学ぶか」How・Whatから入っちゃうんですよ。でも大事なのは「何ができるようになるか」です。「本校の生徒がどのように育ってほしいのか」ってことを学校の先生、事務方、もっと言えば生徒も含めて大きな議論をしていくべきかな、と私は思っています。まずはそこから出発する。

この「何ができるか／資質・能力」には文科省の「学力の3要素」がありますが、その他にもSociety5.0の中ではどういうふうに生きる力を持っていくのがいいとか、それぞれの学校の建学の精神もあります、そういったものを皆で議論していくとひとつの型が浮かび上がってくると思っています。そこを初めの一步にしていくことだと思います。

花巻北高校の職員会議の例ですが、花巻北高校は60分授業なので、職員会議の日は授業を10分短縮にするため、60分の時間が会議の時間として確保されます。でも60分で職員会議をやるといっても、はっきり言って単なる連絡だけならば10分もあれば終わります。なので結構時間が余ることもあります。そこで、花北では毎回会議の後に続けてワークショップをやっていました。最初から会議をアイランド型のレイアウトで行うんです。例えば今日のテーマはいじめについて、今日のテーマは本校の強みと課題を知ろうとか、そういうワークショップをやったんです。そうするとやはり声が大きい人がいるんです。「何を言ったか」よりも「誰が言ったか」が大事になる文化ですね、そしたら副校長先生が非常に上手で、声が大きい人たちだけを集めてひとグループをつくるんですね（笑）。そうするとほかのグループの若い人たちが結構伸び伸び喋れて、わりとうまくいきました。そして、ただいい汗かいたねで終わらせるのではなく、ちゃんと学校経営に反映させることにしていました。例えば「職員朝会を止めよう」という意見があると、実際に朝会を止めてみました。そしたら3日もたなかったんで、また復活させましたけど（笑）。トライ&エラーでいいんです。そういう感じでやっていたことがありました。

■ ICTのデメリットについて

デメリットは同然ありますね。使い方によってメリットを生かせるし、使い方によってデメリット満載になってしまうということかと思えます。議論の方向的には、どういう活動にどういう使い方をするのか、ということがまずありますよね。ICTの機器自体のメリット・デメリットではなく、使う流れの中でのことですよね。でもこれは昔から議論しつくされた感があって、1980年代、1990年代は、例えば報酬や罰則としてICTを使わせてはいけないとか、長時間にわたってPCに向かわせてはいけないとか、それから使う必要のないアクティビティに使ってはいけないとか、これらはみな20世紀の議論ですが、それが今でも出てくるというのがちょっとね。もっと中味が進化していかなきゃならないと思うんですよね。ただ、当時と違うのはネットワークのツールとしてICTがフォーカスされているということ、つまり、むしろ個別最適な学びというよりも協働的学びを促進するツールとしての価値について語られていることは注目すべきことなのかなと思います。

■ 本日の感想

さっきの和田先生と後田先生の話聞いて、老子の「法令(ほうれい)滋滋(ますます)彰(あきら)かにして盗賊(とうぞく)多(おお)く有(あ)り」という言葉を思いました。私のような、特に地方公務員は地方公務員法っていう「禁止・義務・制限」の中で生きています。そこでどうしてもつい生徒にも「禁止・義務・制限」を強いてしまう。そういう方向ではなくて、SNSでも先生と生徒の両方が入ったコミュニティをつくって、その中でリテラシーやモラルなどを育てていくことが大事じゃないかと思います。先生は生徒に「それはあかん」って言うておきながら、その中身を知らないわけなんですよ。知らない人から何を言われたって、それは効かないですよ。そんなこともひとつ思いました。

あと幸せの話についてですが、和田先生がなんでこんなにアクティブでいろんなことをやられているのかというと、たずまいが幸せだからなんですよ。私は白百合学園でお祈りをしていますが、「いつも喜んでいなさい、たえず祈りなさい、どんなときにも感謝しなさい」テサロニケの信徒への手紙（新約聖書）というのがあります。この中の「いつも喜んでいなさい」という言葉はすごく大事で、幸せなことがあるから喜ぶんじゃなくて、喜ぶことによって幸せになっていく、ということ。先ほど和田先生が言った逆転の発想というのがすごく大事だと今日は思いました。

■ セッション3 <鼎談>

【テーマ】 教育の不易と流行とは？ そして教師の役割は変わったのか？

鈴木 達哉・和田 美千代・下町 壽男 ファシリテーター 林 巧樹

このセッションは、鈴木先生から「学習の個別最適化の現状と近未来」という講演をしていただき、その後、和田先生と私がそれぞれ「教師の役割は変わったのか？（教師の不易流行）」というテーマで10分ほどコメントし、最後に林氏の司会で鼎談するという形で進められました。なお、このセッションはオンラインの形で行われました。

この中で私が話したことを、以下にピックアップして記します。

お話3 「教師の役割は変わったのか？（教師の不易流行）」

こんにちは、下町と申します。10分間ほど話しますがテーマは和田先生と同じ「教育の不易と流行とは？そして教師の役割は変わったのか？」です。私はスライドを使わずに話します。

お二人の先生が話されたことに重ねるかたちではなく、違う視点で話そうと思ったんですが、先ほど鈴木先生がキャリア教育とアクティブラーニングのつながりを話されて「ああ、なるほどなあ」と感じたので、キャリア教育の視点でまとめようかなと思っています。行き当たりばったりであっちこっちに話が飛んでいくかもしれませんが、ご容赦ください。

まず、聞いていて思ったことがひとつあったのでその話からします。3年前に盛岡三高で高校1年生にキャリア講演をしました。90分ぐらいでした。そうしたらその後1週間後ぐらいに生徒た

ち 300 人分くらいのリフレクションシートが送られてきました。A4 サイズ 1 枚に皆びっしり書いてくれて、私はすごく感動しました。何がすごいかっていうと、そこに私の話の中で印象に残ったキーワードが書かれているんですが、それが 100 種類ぐらいあったんです。「100 種類もしゃべったかなあ」という感じだったんですが、それぞれ皆の受けとめが違うんですよ。

それを見たときに、「これこそ学びなんだ」と思いました。つまり、先生があることを話す、例えば、それが運転免許試験の講義のようなものだったら、話したことがそのままストレートに受信者に伝わっていくべきですね。単純に資格試験で何かを絶対覚えなければならない場面では、教えたことがその通りに受信者に伝わるのが大事です。でも学校における「学び」は、**先生があることを話したときに聞き手はそれぞれ違うことを受け取る**のだと私は思います。だからまさに盛岡三高の生徒たちは主体的な集団なのだと思います。もし、皆が同じようなことを書いてくるんだとしたら、それは主体的ではなくて与えられたことを待つだけの群衆です。だから**リフレクションを見る**というのは、**生徒がどれだけ主体的であるかというのを知るひとつのバロメーター**かもしれないということです。

そこで、テーマの「教育の不易」ですが、学びの不易として私が言いたいのは、**学ぶことは先生が言ったことを効率よく自分の中にインストールすることではなくて、インプットされたものをいかに編み直して自分ごとにしていくのか、**ということだと思います。そこでキャリア教育の視点なんです。**学びとは、自分が AI も含め、他によって代替できない者であること、確固たる唯一の自分であるということを自覚するための活動なのではないかと。これはまさにキャリア教育にも通じる話**ですね。そういう感じがしています。つまり「学ぶ」とは、生きることだとここで思ってしまったわけです。

では、「教師の役割はどう変わったのか？」という話ですが、単純に「変わった」「変わってない」の比較は人によって違うので簡単には言えないけれど、自分自身は変わったのかと自分を顧みたときに、それは明らかに変わっていたんです。今は中学と高校の授業を担当しているんですが、毎時間アイスブレイクをやっていて、それにウキウキしている自分がいます。これは 20 年前、30 年前の自分と比べるとまったく違うことだなと思います。こういうのって「不易と流行」で言ったら「流行」に当たると思っていて、では**教師の不易、教師の役割、教師の資質、教師のたたずまいとしての不易とは何かと考えると、先ほどの話で「自分が世界でただ一人の自分であることを探し求める旅をしていること」が学びだとすれば、教師はそれを見届ける証人だったり、さらに背中を押してくれる同志であること**なのかなと思います。

そこでセッション 1 で話したように、「教師はどういう人であればいいのか？」と考えたときに、まずは**知に飢えている。知識にはないかもしれない、欠乏しているんだけど、それを知っていて、そこを何とか埋めようとしている。そういう姿勢が子どもたちの目にはっきり見えている。**そういうことかなと思っています。

それからもうひとつは、「学ぶこと」や「教えること」が楽しくてしょうがない人。まずは自分が**楽しいんだけど、それを子どもたちや他の人と共有したいな**あという思いを持っている。そういう教師の姿を見ることによって、先生が**懂れる知**というものに生徒が**懂れる**。そういう三角形の構図が生まれてくると思います。

● どうして先生になりたかったか？ またはなろうと思われたか？

積極派ではないと思いますが、少年時代から数学と、あとはコンピュータのつくる世界に関心がありました。SF も大好きで、タイムマシンとか好きでした。それで数学とコンピュータが両方できるような仕事に就きたいと思っていて、それが可能な大学にいったんですよ。ところが数学を極めるには私はあまりにも落ちこぼれてしまって、これはあかんと（笑）。だけど私は教えるのが好きだったんですね。それで教師になろうとした。

余談ですが、教師になって何年かして、職場の PC の OS が MS-DOS から Windows に変わったときはすごく大変で、情報処理科の責任者でしたが、機器管理やソフトやシステム開発だけでなく「プリンターの紙が無くなったよー」「エクセルのやり方教えて」などとあちこちから何から何までもう。そのとき思ったのが、これって「数学とコンピュータが両方できる仕事」というかつての夢がかなっている状態なのか、だとすれば悪い夢だったなって思いました（笑）。そんな感じ。

● 下町先生はもともと教えることが好きそうな感じ。 数学の授業を見ているとそう思う。

そうですね、好きですね。自分のキャラクターに自信がないので、モノを使ったり技を編み出してそれに頼ったりしてるんですよ（笑）。ニコっと笑っているだけでキャーキャー言われる先生もいるわけですが、私はそうではないので（笑）、苦労するんです。いろいろと乗り越えてきました。

● 鈴木先生の「キャリア教育」の話についての感想を。

鈴木先生の「誰も置き去りにしない」というこの言葉が心にぐっときました。

リンダ・グラットンの「Life Shift」に「100 年ライフ」って言葉が出てきますね。人生 80 年時代は、学びのステージ、働きのステージ、引退して余生を過ごすステージの 3 つのステージに分けられていたんだけど、それが 100 年ライフになると、それぞれを単純に引き延ばすってわけにはいかなくなるということです。働き方がどんどん変わって行って、複数の仕事をする人も出てくるし、リタイアした後に、あらたな学びに進んだり、また人によっては中学生でも起業する。そうになると今までのような横並びで世代の中で競争していくようなキャリアステージではなくなっていきます。それって必然的に「だれも置き去りにされない」ことになるのかな？って思いました。競争することがないから・・・。

あと、個別の学びというのはまさにパーソナライズ、つまりそれぞれの人たちのそれぞれの目標が達成されることだとすれば、そこには序列化は生まれない。置き去りにされないなど。「個別最適な学び」というのは、私の中ではややネガティブな思いもあるんですが、鈴木先生が言われたことは「だれも置き去りにされない学び」なのかもしれないと思いました。

●セッション1の下町先生のお話のとき考えたのは、「個別最適」に行けば行くほど、利己主義的にならないのか、ということと、もう一つは、そこでの教師の役割とは何なの、というもの。皆が iPad で学習して自分に合った教材が送られてきて勉強するんだったら、教科面だけで言うと先生って要らないんじゃないか？ 全員〇〇スクールで勉強したらいいってことになりかねない。でもだから教科じゃないところに教員の役割があるんだというそういう話になると、それはまたそれで違うんじゃないかと思う。そこはどう思うか。

アタマプラスという AI 教材をご存知ですか。私が前にいた学校ではアタマプラスを入れているんです。基本的に「個別最適な学び」が学びのパーソナライズだとすると、それはいわゆるフィードバック系を持つ学びなんです。学んだ結果があって、そこに対して「これはいかがですか」「あなたはここが欠乏していますね」「もっとここをやったらいかがですか」というフィードバックサイクルの中でだんだんと自分が大きくなっていくという学び。

だけど私は、そこには、大学受験で合格を勝ち取るためのスキルを磨くというようなモチベーションやコンセンサスがある中で成立しているところの「個別最適」のような気が一方です。さっき盛岡三高の話をしてしましたが、講演を聞いた生徒がそれぞれ違う感想を持ったというのこそが本当の個別最適の学びではないかと私は思うんですね。

私の教え子の話ですが、フラメンコギターの発表会があって、そこで失敗したというんです。彼女が言ったのは「失敗してしまった、やっぱり基礎が大事、基礎だ」と。そしたらある先生が「ほらね、発表の前には、まず基礎をちゃんとやってなきゃだめだよ」というような言い方をしたんです。でも、私は違うと思う。発表する・発信するという活動があることによって、逆に基礎が大事だと気づくんですよ。プレゼンテーションをするとか何かを発信するというのは、その結果をうんぬんするのも大事だけど、それだけじゃなくて、前後でどういう行動・決断をするのが大事なんですよ。

「個別最適な学び」の話に戻るんですが、それは、AI などによるフィードバックサイクルをもつような単純なものではなくて、**発信などの外化の活動という「協働的な学び」があるからこそ生まれるものだと思うんです。**つまり「個別最適な学び」とは単純に自己拡大する完結したループを提供することじゃなくて、そこに行くためにはつねに「協働的な学び」という「冒険」が存在していて、そこから自分の欠乏なり、「基礎が大事だな」とわかって個別の学びに向かうという。そういう感じなのではないかと思います。

●教師は指導者なのかコーディネーターなのか、カウンセラーなのか。一人で何役もしなくちゃならないってことか。

昔から「教師は五者であれ」って言ったものです。学者、役者、芸者、医者、易者。今はファシリテーター、ネゴシエーター、キュレーター、なんていう人もいます。けどさっきのチャットにもありましたが、クレーム対応とか本当に大変なんです。教頭とか副校長の段階だとだいたい 90 分コースですよ、こちらが地雷を踏むとんでもないことになる。そういうことが、あまり地域などに知られていない部分があるのかもしれないです。

●公立と私立で違いがあるか。両方経験されている下町先生はどう思うか。

うーん。やはりいろいろじゃないかと思います。私立といっても文房具から全部買わないとならないような私立もあるし、進学に特化したようなところもあるし。私自身は公立から私立に行ったときに、公立の学校が持っている不自由さ、融通の利かなさというものから解放されているのかなと思ったんですが、そこは必ずしもそうではないようでした。いいところもね、もちろんいっぱいありますよ。

●先生になられた 30~40 年前、「あの先生いいなあ」と感じた先生と、今の若い先生も含めて、「あの先生いいなあ」というのは変わったか？

私の妻も実は教員なんです、それで 2 人で自分が影響を受けた教師 10 人というリストをつくったことがあります。先輩の先生であろうが後輩の先生であろうが関係なくです。リストにあげた先輩はいまだに「巨星」って感じで心に残っています。でも私が歳を取ってくると年上はいなくなってくるし、若い先生をリスペクトするというのも多くなっています。

少し話はずれますが、今の私は週に 3 日しか学校に行っていないくて、11 時間しか授業を持っていません。若い先生は授業以外にもめっちゃくちゃ仕事があつて。だからすごく忙しいです。なのに私ともうひとりの 75 歳の数学の先生は 2 人で向かい合って数学の話ばかりして楽しんでいるんです。彼らに悪いなあって思いながら。

でも一方で前期高齢者になる私がそんなにたくさんの授業をやるとかえって迷惑になるということもあるんですよ（笑）。だから私がちょっとだけでもやるという働き方をするのは、若い先生方の負担を少しだけ軽減できるのかもしれないとも思います。

例えば「クレーム電話が来た」「まかしとき。よし受けよう」とかって。そういう分担の仕方をして、お金だってそんなに必要じゃなくなるじゃないですか。そういうふうに、若い先生の仕事を少しずつ分担する。そうじゃなくて再任用みたいに従前と同じような仕事量をこなして、なおかつ給料が半分になるといったら、モチベーションは下がるし生産性は上がらない。

「あの先生スゴイ！」というカリスマ型リーダーよりも、仲間がそれぞれの強みで仕事をシェアしていくといった、働き方もいいのでは、と思うこの頃です。

●これからの保護者とのかかわり方はどうあればよいか。

以前勤めていた学校は、東大や医学部を目指すという経営ポリシーを持っていることもあって、塾の先生が言うことにウエイトを傾ける親も多かった。また、朝に子どもが自分で起きたら 30 円とか、期末考査で何番だったら iPad 買って与えとか、そんなふうにモチベーションを高めようとする保護者もいました。そんな中、親もストレスがたまるだろうということで、そのころ PTA の 20 人ぐらいの有志の方を集めて率直な意見や本音をいつまでも聞く、という「ガス抜き会」というのをやったりしていました。結構良かったと思います。

それから、保護者でも別の考え方、180 度違う方もいるわけです。例えば進学指導だけに力を入れて結果を出してほしいという保護者と、そうじゃなくてちゃんと心の教育をしてほしいという保護者と。でもそれって本当は二律背反ではなくて、むしろ一体のはずなんです、なかなかつな

がってこない。ではそんな対立があったときにどうするかというと、**その先を考え、「なぜ」を掘り下げ抽象度をあげていく**んです。すると**結局は子どもを幸せにしたいというコンセンサスにたどり着く**。だから、「その先」にあるのは Well-being のようなものではないかと思います。

アメリカに「What would you do?」という TV 番組があります。ある状況を仕掛けて一般人の反応を観察するという、いわゆるモニタリングですが、日本とは違って、差別や偏見などにスポットを当てているんです。その番組の中のある回にこんな話がありました。

ある学校の先生がスーパーで生徒の鉛筆や文具を自分のお金で全部買いそろえたらお金が足りなくなってしまうという状況を仕掛け、それで周りはどう反応するかを見るというものでした。すると、お金が足りなくなって困っている先生に、その様子を見た周りの人皆たちが「私が出します」って言ってどんどん支援していくんです。コミュニティ全体が先生の大変さを知っていて、何とかしようと思っている。そもそも、そういう番組がつくられること自体すごいと思いました。先生が自己犠牲的な活動をしていることをちゃんとリスペクトしているんですね。で、なんでこういう行動を起こせるのかなって思ったときに、**宗教が根底にあるのかもしれない**と思いました。**だとしたら、日本においては、それに代わるものとして必要なのが Well-being 教育だ**と私は思っています。

●最後にテーマの「不易と流行」でもいいし「教師の役割は変わったのか」でもどちらでもいいので、一言でまとめてください。

『学ぶことは深く個人的なことであると同時に、本質的には社会的なものだ。学びは抽象的な知識だけで人と人をつなぐ』。これはピータ・センゲの言葉ですが、この言葉をあらためて、自分の腹に落としたと思いました。